竹の話

新年と言えば松竹梅。この中から竹を取り上げたが、これほど私たちの生活に密着した植物も少ないだろう。筆、箱、箒、符、節、算、箋、籍、簿、笑など全部竹かんむりが着いていて、人間の文化的営みに関する表意文字が多い。話は飛ぶが、今年、本州中部以北で6 月ごろ「根曲り竹」の若芽を取りに山に入った人が熊に遭遇する事件が相次いだ。若筍は山菜として珍重されている。

竹の皮の
日の丸弁当

戦前、戦中は竹の皮に包んだ日の丸弁当が流行った。私の子供時代のおやつとして、竹の皮に梅干し、紫蘇を入れて三角に包み、角から汁をすすった。飴代わりである。竹で出来た漁具として筌(うけ、うえ) は弥生時代の遺跡から出土している。簗(やな) は誰でも知っているであろう。

広島のカキ養殖は、17世紀、寛永年間に始まったが、安芸郡で海中に立てた枝付きの竹にカキの幼虫が付着したことから始まった。東京大森海岸でのノリ養殖は、竹の簗にたまたまノリが着いたのがきっかけと言われている。現在は化学繊維の網簗に代わっている。

竹は草？ 竹は
稲科の種子植物

九州の大分と熊本の国境の山深い村はマダケの林ばかりで、住人は一日中、竹の仕事で生活しており、竹を主な食糧としている。村人は「壮健なこと、世に類なし」「医を頼むこともなし」と言われているとか。何か原因がありそうだが、竹に含まれる薬効や、竹林に溢れている竹の精気と浄化作用が影響しているのかもしれない。

竹は稲科の種子植物である。ただ種子では繁殖せず、地下茎が繁殖器官である。大学の受験英語で「Bamboo is a kind of grass.」と習った。竹は草なのである。ただもうそう竹の林をみると、草でも木でもないと思わされてしまう。

その竹は、1 世紀に1 回も花が咲かない。60年説は俗説で、実際は120 年に1 回咲き、そのあと竹、笹は枯れてしまう。竹、笹の開花は、神秘的な「世紀の大ドラマ」である。目撃者はほとんどいないはずだ。枯れても残った地下茎が芽をだしてまた繁茂する。竹や笹の花の実は、小麦と同じ栄養素を持ち、救荒植物の一つとされてきた。

文庫本:開高健
パニック

この栄養価の高い実を狙って鼠が大繁殖をする。開高健の「パニック」はこの問題を取り上げ、人間社会を大混乱に巻き込み、最後は鼠たちが、潮になだれこんで終わる。西村寿行の「滅びの笛」は大パニック小説だ。中部山岳地帯に熊笹が開花、鼠の大群が発生、山梨県の村々を壊滅させたあと、県都甲府市を荒廃の極に追い込み、鼠の大群は、東京に向かう。結局人間の手ではどうにもならず、大菩薩峠で、鼠の大群の自壊作用とノスリ、イタチ、ミミズク、狐の攻撃でさしもの鼠攻勢が終わるという内容。西村氏はこの小説で自然保護、野獣の保護の大切さを訴えている、と感じた。

竹といえば「竹取物語」に触れないわけにはゆかない。粗筋は省略するが、お爺さんが竹の中に見つけた子供は実際は「捨て子」だったのではないか。成長して絶世の美人になるが、高貴な人の不義の子だったらあり得る。お爺さんのお金持ちになるのも金づるがあったのであろう。天皇や5 人の貴族の求婚を断るのは、この物語の作者が「反権力」の人だったから。最後に月世界にかぐや姫が帰ってゆくのは、人事をつくしたが、病気で他界した、と解釈したい。以上は私の勝手な想像、寛容下さい。

竹の地下茎は縦横に延びて土をしっかりつかんでいる。だから竹林は、山崩れ、水害、地震に強い、といわれている。京都に竹林が多いのは、以前、度々地震に襲われたからではないのか。ところで私の大学時代の友人に「大藪」という名字の男がいる。家業を継ぎ住職になったが「おれは医者にはなれない」と言っていた。「大藪医院」では客が敬遠するだろう、というのである。

(小林)

参考文献：岩波新書「竹の民俗誌」

「竹」といえば
「竹取物語」に
触れなければ
ならない。